

# 地域芸術祭と学生教育についての研究ノート

石原 康臣<sup>1</sup>

<sup>1</sup>大正大学 地域構想研究所 准教授

(要旨) 2021年現在、日本各地でいわゆる地域芸術祭といわれるアートフェスティバルが盛んに行われている。大規模なものでも2020年には9箇所、2021年には7箇所で開催されている。小規模なものを入れるとその数は100を超えるとも言われる<sup>1</sup>。一般的に2000年の「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」をその起原とすることが多い地域芸術祭であるが、それから20年が経ち、その是非についても語られるようになってきた。本考察では地域芸術祭の起源と隆盛を俯瞰し、学生への教育活動と地域復興の関係のありかたについての可能性を研究する。

キーワード：地域芸術祭、アートフェスティバル、地域復興、映画祭

## 1. はじめに

地域芸術祭やアートフェスティバル、アートプロジェクトとよばれる活動が日本各地で多数開催されるようになってきている。アートフェスティバルとは、熊倉純子による定義である「現代美術を中心に、1990年代以降日本各地で展開されている共創的芸術活動であり、作品展示にとどまらず、同時代の社会の中に入りこんで、個別の社会的事象と関わりながら展開される。既存の回路とは異なる接続/接触のきっかけとなることで、新たな芸術的/社会的文脈を創出する活動」<sup>2</sup>するものとする。

次に2021年に行われた大規模なものを簡潔にまとめ、概要を見ていきたい。その後、それらを参考にして小規模ながらも行った南三陸映画祭をまとめていく。その活動から学生教育と地域芸術祭の関係の可能性を探っていく。

## 2. 2021年におこなわれた地域芸術祭

### (1) 房総里山芸術祭 いちはらアート×ミックス2020+

千葉県市原市で2021年11月19日から12月26日にかけて開催された。2014年に第1回を行い、2017年、2020年とトリエンナーレ形式で開催。2020年は新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防止するために1年延期して開催企画されたが、2020+とし2021年に開催をしている。

ディレクターに北川フラムを起用。開催の目的は「アートの力を最大限に活用し、本市の歴史や文化、里山などの地域資源とアートの関係性を紡ぎながら、地域の魅力向上や、交流から定住による地域活性化、市民の地域への愛着と誇りの創生など、好循環を創出することにより、SDGsの理念にも通ずるアートを活用した持続可能なまちづくりを推進すべく実施するもの」としている。<sup>3</sup>

参加アーティストは17の国と地域から70組に及び、市原市を南北に走る小湊鐵道を中心に、五井

<sup>1</sup> 小泉元宏：地域社会に「アートプロジェクト」は必要か？—接触領域としての地域型アートプロジェクト—、地域学論集 鳥取大学地域学部紀要9(2)、pp.77-93、2012年

<sup>2</sup> 『アートプロジェクト—芸術と共創する社会』

熊倉純子(監修)、菊地拓児・長津結一郎(編集)水曜社 2014年

<sup>3</sup> 房総里山芸術祭 ICHIHARA ART × MIX 2020+基本計画書

エリア、牛久エリア、高滝エリア、平三エリア、里見エリア、月崎・田淵エリア、月出エリア、白鳥エリア、養老溪谷エリアの9つの地域に渡り展開された。

鉄道を中心にしていることから、17駅すべての駅舎にアーティストによる作品展示が行われているのも特徴である。また宿場町で栄えた牛久エリアでは、店や街の歴史を感じさせる中崎透の作品「Clothing Fills in the Sky」や、平三エリアではマリア・ネポムセノによる「知るは海」は、2016年に並行した旧平三小学校の校舎内において、リオデジャネイロに住む子どもたちの絵や音を素材にして制作したインスタレーション作品である。日本と地球の反対側にある子どもたちの絵が、日本の廃校で展示されている点が興味深いものとなっている。また、白鳥エリアではフォトグラファーの石田真澄による「yellow」作品があった。これは作家がひとりで市原市を歩き、撮影した写真を作品化して展示したものとなっている。

## (2) 北九州未来創造芸術祭 ART for SDGs

福岡県北九州市で2021年4月29日から5月9にかけて開催された。2021年が初回である。

ディレクターに南條史生を起用。開催目的はその名にもあるように、「歴史的、地理的にもアジアの玄関口として発展してきた北九州市において新たなまちづくりのスタートを迎えるにあたって、グローバルな課題である「SDGs」を先進的に取り組む<sup>4</sup>としている。

参加アーティストは日本を中心にした全29組。会場はスペースワールド駅前改札広場、東田第一高炉跡、北九州イノベーションギャラリー、北九州市立いのちのたび博物館、北九州市環境ミュージアム、東田大通公園、北九州市立美術館の7エリアよりなる。

特徴的な作品として、団塚栄喜による「Medical Herberman Café Project」がある。これはその土地の薬草で人形のハーブ畑（メディカルハーブマン）をつくる作品であった。そしてそこ

で取れたハーブでつくるハーブティを提供するカフェを運営し、その収益で次の場所でハーブマンを制作していく。一つの作品の中で循環するプロジェクト型の作品でもある。

また、スペースワールド駅前改札広場ではチェ・ジョンファによる「Gardening」作品がある。巨大化されたカラフルな野菜と果物のバルーン作品であるが、常に新鮮な空気が送り込まれ揺れ動くその作品は、ダイレクトに土地、空気、野菜という自然の恵みを表現しており、SDGsを想起させるものとなっている。

## (3) 北アルプス国際芸術祭2020-2021

長野県大町市で8月21日～10月3日（パフォーマンス期間）、10月2日から11月21日（アート期間）で開催された。2017年に第1回を行い、今回は2回目となる。

総合ディレクターに北川フラムを起用。

開催目的は「アートのもつ働きによって住民が地域の魅力を再認識し、そして多様な人々が協働し集うことで、住民が元気で魅力的な地域になる契機となることを目指す<sup>5</sup>」こととし、参加アーティストは14の国と地域から26組のアーティストが参加した。

会場は市街地エリア、ダムエリア、源流エリア、仁科三湖エリア、東山エリアの5エリア。

仁科三湖エリアのマリア・ヴィルツカラによる「何が起こって 何が起こるか」は、自身で湖に流された寺院の鐘の音が今でも聞こえるという伝説と、江戸時代に海陸の物資を運ぶために作られた塩の道の歴史を合わせて、未来と過去を交差させた作品が制作された。

## (4) 東京ビエンナーレ 2020/2021

東京都千代田区、中央区、文京区、台東区を中心に2021年7月10日から9月5日にかけて開催。

総合ディレクターに中村政人と小池一子。開催目的は『「アート×コミュニティ×産業」を

<sup>4</sup> 北九州未来創造芸術祭 ART for SDGs ウェブサイト 概要ページ <https://art-sdgs.jp/about/> (2021年2月17日閲覧)

<sup>5</sup> 北アルプス芸術祭2020基本計画書

キーワードに、地域の人々とともに、「HISTORY & FUTURE」「EDUCATION」「WELL-BEING」「RESILIENCY」を活動コンセプトとして、私たちの文化を、私たちの場所であっていきこと<sup>6</sup>と設定して、国内外の64組のアーティストたちが参加。

神田・湯島・上野・蔵前エリア、大丸有・日本橋・京橋・銀座エリア、本郷・水道橋・神保町エリア、番町・麴町エリア、谷根千・日暮里エリアの5エリアを中心にその他のエリアでも展開された。

チェン・ティンティンの作品「アイランド」、「ペニンシュラ」、「アンダーグラウンド」は鑑賞者のスマートフォンに専用アプリをダウンロードする。そして指定された地点から歩きはじめることでスマートフォンから過去の人々が呼びかけてくる。現在自分があるその現場を再認識させる作品となっていた。

### (5) 奥能登国際芸術祭2020+

石川県珠洲市全域で2021年9月4日から11月5日にかけて開催。

総合ディレクターに北川フラムを起用。2017年に第1回を開催し、今回が2回目となる。

活動目的を『珠洲市は「祭とヨバレ（食）」に象徴される「忘れられた日本」が現存する過疎高齢の「さいはての地」である。地方創生の切り札として、北川フラム氏を総合ディレクターに迎え、2017年秋に奥能登国際芸術祭を初開催した。』<sup>7</sup>とし、16の国と地域から53組のアーティストが参加。

大谷エリア、日置エリア、三崎エリア、蛸島エリア、正院エリア、直エリア、上戸エリア、宝立エリア、若山エリアの10エリアからなる。

大谷エリアの何条嘉毅の「余光の海」は現地のさまざまな素材を使いインスタレーションとしている。会場中央部には珠洲のち層から掘り出した砂を敷き、木造船や古いピアノなどを据え、それに映像を投射する。時代が経つにつれて埋もれていく物の記憶を再度新たに提示している。

<sup>6</sup> 東京ビエンナーレ2020/2021ウェブサイト 開催概要ページ <https://tb2020.jp/about/> (2021年2月17日閲覧)

<sup>7</sup> 奥能登国際芸術祭2017成果報告アーカイブ

### (6) 六甲ミーツ・アート 芸術散歩』2021年

兵庫県六甲山を中心に2021年9月11日から11月23日にかけて開催された。

目的として「現代アートの魅力と共に、六甲山をより多くみなさまに知っていただくことを目指す」<sup>8</sup>とし、国内のアーティストを中心として34組のアーティストが参加。

六甲山上に12会場を有し、サテライト会場として有馬温泉エリア、JR 三ノ宮駅前の特別展示からなる。

明和電機や東芋といった兵庫出身の作家の参加が2021年の特徴でもある。2010年から毎年開催され2021年で12回目の開催となる

風の教会の空間内で天井に映像を投影した東芋の作品は、風の教会から受けた作家の感覚や感情の動きをアニメーション化した作品であり、風の教会の空間がまるごと取り込まれているインスタレーション作品となっている。

## 3. 地域芸術祭の歴史と問題

前章ではざっと2021年に行われてきた代表的な地域芸術祭をみてきた。ここから言えるのが、どの芸術祭においても地域の活性化を第一の目的として開催していることが見受けられる。確かに、現在各地に広まっている地域芸術祭のムーブメントは、その成功例を2000年に行われた「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」によるところが多い。簡潔にこのムーブメントの歴史をまとめてみると、以下のようになる。

1987年のセゾン文化財団、1989年のアサヒビール芸術文化財団の設立を中心に、バブル経済の中で富を抱えた企業は、その広告戦略のひとつとして芸術支援活動を始めた。その後それらの活動は1990年の社団法人企業メセナ協議会の発足につながっていく。メセナ活動はバブル経済の崩壊とともに停滞していったが、その後、企業にとって変わり芸術支援の担い手となったのが地方自治体であった。それは1999年から2010年にかけて行われ

<sup>8</sup> 六甲ミーツ・アート芸術散歩2021ウェブサイト 開催概要ページ <https://www.rokkosan.com/art2021/about/> (2021年2月18日閲覧)

た、いわゆる平成の大合併によって誕生した合併市町村による地方経済の停滞や公共投資の減少に対処する狙いもあった。バブル崩壊後の失われた30年と言われるように、道路や建物の公共インフラへの投資が厳しくなる状況において、インフラ投資よりも低制作費で実施できる投資としてアートが利用された<sup>9</sup>。

2000年に第一回が開催された「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」は、事業規模として現物協賛を含めて約6億5千万円とされている。そしてその経済波及効果について、民間の研究所の推計調査では来訪者の消費支出は約17億円と算出されている<sup>10</sup>。この「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」の成功は、その後日本各地の地方自治体の参考となったことは想像に難くない。

このようにして、地域芸術祭はその始まりから地域の再活性化を目的として開催された。そして地域芸術祭は公的事業費が多く入ることからも、町おこし事業として成功するための開催については、構成するアート作品についての批評性というのは希薄になりがちである。また、地域芸術祭のアート作品の特徴として、アートプロジェクト型の作品が多くなることも一つの傾向であろう。

アートプロジェクトとは現代美術用語辞典によれば「作品そのものより制作のプロセスを重視したり、美術館やギャラリーから外に出て社会的な文脈でアートを捉えたり、アートを媒介に地域を活性化させようとする取り組みなどを指す。」<sup>11</sup>とされている。近年言説される「関係性の美学」という言葉及び概念がそれに近い。「関係性の美学」はパリの現代芸術センター「パレ・ド・トーキョー (Palais de Tokyo)」の共同設立者の一人で、キュレーターのニコラ・ブリオが1998年に発

表した著書である。小泉元宏によればそれは「従来のアート作品と鑑賞者間でのコミュニケーションという二項対立的な関係性を超えて、アーティストを含む、多くの人々のあいだで相互に交わされる何らかのコミュニケーション行為や、結ばれる関係性に関心を抱くアートが隆盛していることを示した」ものであり、「それら間主観的な新しい形態の芸術形式は、参加型、体験型、あるいは協働の態度によって特徴付けられる。」<sup>12</sup>ということになる。その新たな芸術形式をブリオは「関係性の美学」と呼んだ。

地域復興のために、アーティストと現地の住民や観光客との間で協働を行うことはより効果的に作用する。元々がそのような性質を持っていることから、作品がアートプロジェクト化することは親和性が高いと言える。そのように、公共事業としての側面と、実行される方法論とが結びつき、また効果としての結果が金銭的にわかりやすく出てしまうことによって批評がしにくくなっている現状があるだろう。

しかし批評の不在でアートの存在は致命的になる。ここで、2014年に文芸評論家の藤田直哉が発表した「前衛のゾンビたち-地域アートの諸問題」でその問題点の指摘を提示する。藤田は「地域アート」を「ある地域名を冠した美術のイベント」と再定義し、「現代アート」から発生した新しい芸術のジャンルとした<sup>13</sup>。そして椎原伸博によれば『「地域活性化」に奉仕し、閉じていく現状に不審を抱き、「芸術が芸術という固有の領域であることによって期待されていた、現世を超えたある種の力を失うこと」(藤田編2016年：41頁)を危惧する』とした。

また、2015年に東京大学の北田暁大と千葉大学の神野真吾を共同代表として組織化された「社会の芸術フォーラム」では、その設立趣意を次のよ

<sup>9</sup> アートと地方の危険な関係～「アートフェス」はいつまで続くのか?ウェブサイト <https://gendai.ismedia.jp/articles/-/49691> (2021年2月19日閲覧)

<sup>10</sup> 越後妻有アートトリエンナーレ2000 大地の芸術祭・総括報告書

<sup>11</sup> 現代美術用語辞典 アート・プロジェクトページ、<https://artscape.jp/artword/index.php/アート・プロジェクト>

2022年2月21日閲覧)

<sup>12</sup> 小泉元宏: 地域社会に「アートプロジェクト」は必要か? —接触領域としての地域型アートプロジェクト—、地域学論集 鳥取大学地域学部紀要9(2)、pp.77-93、2012年

<sup>13</sup> 藤田直哉、前衛のゾンビたち-地域アートの諸問題、すばる36、2014年

うに書いている。

地域系アートは地域社会のあり方を、アートを通して、アートにおいて問い返していく試みであり、また、「社会」との接触においてアート自身が変容を迫られる、そうした再帰的な実践であるといえます。(中略) アートによって社会の日常に異和をもたらし、日常そのもののあり方を問い返していくとともに、アートそれ自体が社会との関係を「アートであるがゆえに可能である」という自律性を踏まえながら捉え返していく契機。そうしたものが、地域系アート、あるいは特定の地域を舞台としたリレーショナル・アートの眼目であると考えます。

以上のように地域芸術祭は地域への有効性を考えながらも、アートを手段とせず、アートの自律性を担保することが必要となってくる。自律したアートによって作品がその地域芸術祭においてより効果が発揮されることが大切である。

#### 4. 南三陸映画祭と学生活動

南三陸映画祭の開催にあたり、開催までの経緯についてまとめる。その後、具体的な学生の活動や指導についてまとめ、実際に現地で行ったことを報告する。

##### (1) 開催経緯

南三陸映画祭は2016年に行われた。その経緯に2011年の東日本大震災がある。この震災の復興支援として、大正大学は震災直後から現地へ行き活動を行っていった。主には東北再生「私大ネット36」と「南三陸学びの宿 いりやど」の二つの企画を柱に東北の復興支援を行ってきた。それに加え、筆者が当時に所属していた表現文化学科も毎年「南三陸プロジェクト」として有志学生を募り、教員とともに現地へ行き、現地のフィールドワークを行った上で様々な復興支援活動を行っていった。2011年の震災直後は、救援物資の仕分けや、仮設の避難所へ物資や花を届けるなどの活動

を実行した。2年目からはそれらの活動に加えて「南三陸学びの宿 いりやど」の近くにある神社の境内において宵祭りを行い、現地の方々と交流する催し物などを行った。

そのような活動が5年も経つと、行政による町の復興などは随分と進んでいき、救援物資の仕分けのような直接的な支援は無くなった。それにより、表現文化学科が行う活動をより学びの専門性を活かしたものにシフトしていくこととなった。具体的には宵祭りによる近隣への文化としての地域復興支援の強化を行うこととした。そこで筆者の担当する3、4年生のゼミ生を中心に、その他有志の学生により、また普段の学びを十分に活かすことを主に、南三陸で映画を制作し映画祭として宵祭りを企画した。

##### (2) 準備学習

次に、南三陸映画祭を開催するまでの事前学習についてまとめていく。

地域を復興支援する活動としての成功例として「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」を取り上げ、ゼミ内で講義を行った。そしてゼミ生のより団結を図ることも目的とし、夏季休校期間に越後妻有アートトリエンナーレ会場へのゼミ旅行を計画し開催した。そのゼミ旅行では、事前に行った講義を踏まえ、学生自身に見学ルートを設定させた。なお、実施した年はトリエンナーレの開催年ではなかったため、開催年ほどの盛り上がりを経験することは出来ないが、常設となっている施設や作品を体験することができるため、そこを中心に回るよう指導を行った。また越後妻有アートトリエンナーレの会場は760km<sup>2</sup>にも渡るため、それらを回るルートの設定から集客についての演出についても認識させた。

学生はまず情報収集をしやすい十日町市の「越後妻有里山現代美術館キナーレ」を集合場所にし、その美術館の作品を鑑賞することとした。その後、キナーレに併設されたインフォメーションセンターからより詳細の情報を入手しながら、事前に計画したルートを確認し作品を回ることを実施した。

ルートとしては、キナーレを出発後、松代エ

リアへ移動し美術館と郷土資料館を併せた施設の「まつだい農舞台」、日本大学芸術学部彫刻コースの有志が制作した「脱皮する家」を鑑賞した。「脱皮する家」は同じ大学生が制作したということから、それぞれの学びの特性をどう活かすことができるかということの気づきを狙った。その後松之山エリアへ行きクリスチャン・ボルタンスキーの「最後の教室」を鑑賞した。「最後の教室」は廃校を利用した作品であるため、学生に元々の空間としての意味と異なる空間へ変容することの認識をさせることができた。

その後、マリーナ・アブラモヴィッチの「夢の家」などを見学した。その他にも目的としている作品へ移動する際も突然出会う作品に学生は驚きながらも、それを楽しみながら時間が許す限り回っていった。宿泊も作品の中に泊まれる宿を選び、その夜は作品を見て回った感想などを話しながら就寝となった。

翌日もまた学生によるルートで回り、川西エリアのジェームズ・タレルの「光の館」、中里エリアのカサグランデ&リンターラ建築事務所の「ポチョムキン」、内海昭子の「たくさんの失われた窓のために」などを見学した。ここでゼミ旅行の第一弾は終了とし、2人を残し解散した。残る2人はその後にゼミ旅行第二弾として新潟県佐渡ヶ島の「岩首竹あかりの集い」へ移動をした。

「岩首竹あかりの集い」は2021年に15回を迎え、岩首地区を訪れる学生たちと地域住民が協働して行うイベントである。岩首地区も少子高齢化している地域であり、管理が十分に行えない竹林の問題があった。その竹林の伐採、整理を、訪れた学生が地域住民とともに行き、伐採した竹とろうそくを使って灯籠を作り、岩首談義所の周辺に設置する。そして点灯式の当日にはミュージシャンによるライブ演奏や現地の太鼓の演奏などを行うお祭りとしている。この活動に学生が参加し、竹林の整備について、またその加工方法、そして現地の人々との協働作業やコミュニケーションを体験することができた。また、イベント当日に向けて設営準備について、またイベントの遂行についても体験することができた。

### (3) 実習作業

学生はそれらの経験を踏まえ、南三陸映画祭の企画運営に入っていた。参加学生は表現学部の2年生から4年生までの11人。教員は筆者と後日合流する教員の2名。技術サポートして大学の映像スタジオの管理者1名、そして現地の「南三陸学びの宿 いりやど」の大学スタッフが担当した。期間は2016年9月12日から17日に現地に滞在し、16日に映画祭を行った。以下、現地での詳細を記し、その成果をまとめていく。

#### a) 一日目

午前8時に大学を出発し、約5時間半かけてバスで南三陸に到着する。到着後は現地の大学職員が添乗し、そのままバスで南三陸の防災庁舎跡、戸倉中学校跡といった被災した現地を視察した。震災当時にテレビニュースで何度も見た津波の様子を、骨組みになった防災庁舎や、波の痕跡が残った戸倉中学校跡を見たことは、現実的な認識となった。その後、南三陸図書館へ行き、過去の南三陸、震災情報収集を行った。また、滞り場所となる「南三陸学びの宿 いりやど」(以下、いりやどと称す)へ移動し、震災についてまとめられたDVD上映を行った。これらのフィールドワークを踏まえ、3人一組(ひと班は学生2人プラススタジオ管理者)で4班をつくり、各班が15分程度の映像作品を制作することとした。

初日から各班で打ち合わせを開始し、南三陸のどこで、どのような作品を制作するかを話し合い、またどのような情報をよりフィールドワークをする必要があるかを認識させた。教員は班ごとに何度も作品案を教員に相談し、企画会議を重ねた。

#### b) 二日目

この日から毎朝定例のミーティングを行うこととし、昨日の作業内容の報告、そしてそこから本日の活動計画を報告させることとした。その後、より企画を詰めるために各班それぞれがフィールドワークを行った。現地の移動は、いりやどから借用した車を教員が運転し、学生を必要場所へ送り迎えを行った。そのため4班それぞれの希望をまとめ、効率的にその移動を組むこともそれぞれの班で調整することとなったため、無駄のない時間の使い方、映像制作で言う「香盤」の組み

方をより学ばせることができた。

1班は企画会議をいりやどで行い、映画祭の会場となる八幡神社の下見を行い、そのまま撮影をスタートさせた。2班は漁港へ行き、撮影場所を探すロケーション・ハンティング（以下、ロケハンと称す）を行った。3班は一日中いりやどにて企画会議を行い、作品の企画案をより強固に詰めていった。4班は南三陸図書館へ再度行き、南三陸にあるモアイ像についての調査を行った。

夕食後は我々が宵祭りを行った後に八幡神社で行われる例大祭の練習を見学しに回った。例大祭では地元の伝統となっているお囃子や太鼓そして獅子舞があり、各公民館などで老若男女集まって行われている練習を見学することができた。またその記録映像などを撮影することもでき、現地の方々とコミュニケーションを取ることで現地の理解をより深めることができた。

#### c) 三日目

この日から、現地の人々へ向けた映画製作ワークショップを開催した。映画の作り方を講義し、企画を立て、撮影テストを行うことなどを当初は企画していた。しかし参加者が主に小学校帰りの子どもたちであったことから、講義をしても効果がないということが判明。子どもたちとコミュニケーションを取ることを中心とし、撮影の体験を行うワークショップに変更することで、そのまま学生の映像作品に出演するという形をで実行していった。

1班は先日と同様に八幡神社へ行き、ワークショップに参加した小学生2名を出演させる作品とし、撮影を行った。初めて演技をする小学生は、最初は戸惑いながらも、次第に学生に心を開いていき、演技に対応していくようになっていった。学生にとっても、どのように話をし、興味を持ってもらうことで子どもたちが動くかということ学ぶことができた。この様子を朝日新聞の記者に取材されて、映画祭当日の朝刊に掲載されることとなった。

2班は物語のある映画ではなく、映像詩の形式で企画を固めていった。いりやど周辺の東屋や田んぼへ行き、晴天の中に青色の傘をさした白髪のかつらを被った登場人物が歩き回るという撮影

を行った。その映像で南三陸の日常にはない世界感を作り上げることができた。その結果、現地の方々から多数声がけをしていただくことができ、現地の情報提供や撮影の協力をさせていただくことができた。

3班はいりやど近辺で撮影を行い、物語の大筋を撮影することができた。その後、復興のシンボルともなっていた南三陸さんさん商店街へ移動し、撮影を行った。海岸では映像作品のキーとなる親子が語り合うシーンなども天気恵まれ撮影に成功することができた。

4班は初日にフィールドワークを行った戸倉中学校跡でロケを行った。図書館で得た南三陸のモアイ像についての情報から、モアイ像を契機とした物語作品が生まれ、その撮影を行うことができた。

#### d) 四日目

南三陸映画祭本番前日。教職員は午前中に地域の方々の協力を得てテントやパイプ椅子などを借りることができた。また、八幡神社にて地域の方々が例大祭に向けてしめ縄作りを行うとのことで、学生も参加し地域活動に協働することができた。2011年から毎年行っている復興支援活動のおかげか、地域の方々はとても好意的に学生そして教職員を受け入れてくれた。

その後、学生は各班に分かれ映像制作に取り掛かった。1班は引き続き八幡神社にて撮影を行い、2班は志津川地区の先の堤防まで撮影に行き、海を背景にした撮影を行った。3班は入谷地区を中心に撮影を行い、4班はメインの登場人物となる出演者を求め、現地の小学生への出演交渉を行った。小学生の撮影に気をつけるポイントとして、当人の承諾だけでなく保護者の承諾も取ることを指導した。また撮影時間にも配慮し、小学校が終わった後の時間で、遅くならない時間までとし、送り迎えや撮影場所等を逐一保護者へ情報を送り、保護者の不安が無いように対応することを心がけた。4班はその丁寧な対応を遂行した結果、出演者の小学生とも大変上手くコミュニケーションができたようで、言われたように演じるだけではなく、小学生自らが演出に提案を行うまでの関係性を築くことができた。

夕方には希望する班の学生を集めてドローンの講習会を開催。具体的な操作方法だけでなく、航空法改正による注意事項等の講義も行った。その後、学生自身が操作を行い、技術習得を行ったが、よりラジコンなどを身近に接していたことなどもあってか、眼を見張るほどの上達をし、教員以上の操作スキルを感じさせるほどになった。

各班とも日中に撮影を行い、夕食後の自由時間などの夜に編集を行うという体制で制作にあたり、作品の完成に近づいていった。

#### e) 五日目

南三陸映画祭本番当日。毎朝定例のミーティングを行い制作の進捗報告を行っていたが、追い込みということで昨晩は随分と遅くまで編集作業を行っていた学生が多かった。健康面の安全も配慮させたが、少数精鋭の学生の気迫を感じた。この日は最初に、お借りしたテントやパイプ椅子、そして持参した音響システム（以下、PA と称す）等の現地セッティングを教職員も一緒に行った。PA 等の設営技術などは大学で授業化しておいたため、学生たちは今まで学んだスキルを活かし、自主的に設営することができた。

夕方からは司会の登壇、ライトのタイミング等も入れて本番と同様にリハーサルを行った。また、今回の映画祭は宵祭りでもあることから、屋台の提供メニューを映画館にちなんだホットドッグ、ナチョス、タピオカドリンクなどの提供とすることを学生が発案し、その調理準備なども行った。飲食を伴うイベントであることから、消防署、保健所へも学生を連れていき、各種申請を行った。それにより、16時頃に消防署のかたによる現地査察の際にも問題なしと判断していただけ、屋台の承認が受けられることとなった。

日が暮れた19時に映画祭がいよいよスタートし、学生が現地の方とともに、現地で制作した15分の映像作品が4作品上映された。先日、朝日新聞の取材を受けた記事が、予定通り本番当日の朝刊に掲載されたことも手伝ってか、50席ほど設けた観客席もほぼ満席になって開催することができた。上映後は映画の制作者と司会役の学生との掛け合いで制作意図や制作秘話などの話を行い、作品に対してのより深い理解を来場者に持ってもら

うことができた。

#### f) 六日目

南三陸プロジェクト最終日。定例の朝ミーティングの後、八幡神社へ行き撤収作業を行った。お借りしたテントやパイプ椅子なども丁寧に拭き掃除も行い、神社の境内の清掃作業も行った。持参した機材等の総ての確認も行い、荷物をまとめ帰路につく準備を行った。最後に、学生には今回の成果報告を簡潔に文章化させ、本年の南三陸プロジェクトは終了となった。以下、学生の成果報告を一部抜粋して表記する。

### (4) 実習結果アンケート

#### a) 3年生・女性・プロジェクトリーダー

今回、南三陸プロジェクトに参加して改めて映像の力の大きさを感じました。作品をみて笑ってくれたり、感動してくれた様子でとてもうれしかったです。（中略）そしてこの映画祭が地元の人にとって恒例のイベントになるよう、来年も再来年も開催したいなと思いました。

#### b) 3年生・男性・プロジェクトサブリーダー

短い期間の間で果たしてうまくいくのかという不安や、無理だという思いや、そこから逃げたしという思いに、ずっと何かしら感じていたと思います。ですが、案が乗り出した時はとても楽しい気持ちになり、何よりも上映会で多くのお客さんに喜んでもらえた時は、心から素直にやってよかったなと思いました。喜んでもらえるだけでこんなに報われた気持ちになったのは、生まれてはじめてだったような気がします。このことを感じたとき将来自分が仕事をするならば、やってよかったと自分が思える仕事をやりたいなと思いました。

#### c) 3年生・女性

私は、今回初めて南三陸プロジェクトに参加しました。（中略）ボランティアが本当に喜ばれるのか。いきなり東京の人がやってきて嫌な気持ちにならないのか。そんなことばかりが頭によぎり自ら動き出せませんでした。（中略）この研修は、震災に向き合うだけでなく、南三陸町の良さをたくさん感じる事ができた研修でもありました。（中略）お祭りの練習風景を見学させていた



だいたいは、「私が漬けた漬物です食べて～」と  
言うてくださり、このことが嬉しかったと伝えたら、「この町の人はこれが普通よ」と言っていて、当たり前前にもこのようなことが行われているということがとても素敵なことだと感じました。

#### d) 3年生・女性

ワークショップの告知は突然になってしまっ  
たが、子供達の参加率はよかったと感じた。特に私の班は偶然帰り道の方向が同じだった女の子と  
出会え、良好な関係を作ることができたので、撮影もスムーズに行うことができた。子どもたちのモチベーションを上げるのは難しく思ったが、慕  
ってもらえて、当日の上映にも来てくれたことが嬉しかった。私は南三陸に来る機会が他の学生より多い。そのため、いりやどの使い方をみんなに説明したり、いりやどの職員さんへの対応や依頼、フライヤー配布の手配など、細々と回りを見て動くことができたと思う。

#### e) 3年生・女性

研修を通して、私が学べたのが長編映画作成のやり方だ。ここまで長い作品を撮ったことがなく、どうすればいいのかやり方も分からない状態だったが、映像経験が豊富な先輩が内容を決めてくれたことで、どうやって15分の映像を飽きさせないで見せるかを知ることができてとても為になった。また、想定通りに進まない事も多々あったので、その時にどう埋め合わせをするのかも決めることができて貴重な体験になった。

#### f) 3年生・男性

今回私は企画、脚本、演出、撮影、編集と、一通りの制作を行った。自分の作りたいものを作れたのはよかったがセンシティブな問題と、製作時間の少なさに苦労した。

#### g) 3年生・男性

今回の研修は私にとって初めて自由に自分の撮りたいものを撮れた研修だったと思います。  
(中略) 全てが未知であり、撮りたいものが多い、使いたいアイデアが多い、そしてそれらを完成させるための自由な時間が大量にあるという素晴らしい条件下で作品を作ることができ、人々を楽しませ、自分も楽しめた作品が出来ました。  
(後略)

#### h) 2年生・女性

(前略) 私をこの研修に呼んでいただき、本当にありがとうございました！先輩たちと作品を作って自分に自信がつかしました。そして先輩たちの作品に対しての熱意は見習うべきものだと思います。ここで経験したことを次の作品制作に生かしていきたいと思います。

#### i) 2年生・男性

今回の研修を一言で言い表すと「臨機応変」だと思う。いつもは、決められた脚本を時間通り進める作業であったが今回は何も決まってないところから、行き当たりばったりで作品を制作していった。とても大変であったが、私はそれがとても楽しかった。つまづくたびに、どうしたらいいのか考え、制作する。先が見えないのがワクワクしておもしろかった。

#### j) 4年生・女性

私は今年で南三陸プロジェクトに参加して3年目になります。去年、プロジェクトリーダーとして参加した際、このプロジェクトもそろそろ転換期を迎えていると実感し、その行く末を心配しながら、1年経ってしまいました。今年は参加できないだろうと思っていたものが、全く違う形になって参加させていただけるということになった時、内心とても大喜びしておりました。(中略)最後の年に、自分の本当にやりたいことでこのプロジェクトに参加させていただけたことは感謝してもしきれません。卒業してもまた何かの形で南三陸に関わりたいと思います(中略)南三陸プロジェクトを3年続けて、本当に良かったです。これからもこのプロジェクトがさらに発展していくことを願います。

## 5. まとめ

はじめに地域芸術祭について具体例を挙げ簡潔にその特徴をまとめた。次に現在、地域芸術祭が指摘されている点についてまとめた。そして地域芸術祭を学ぶことで、新たな復興支援と表現教育の可能性を考え実践していった。最後にその結果として得られたもの、またこれからの改善点についてまとめていく。

南三陸映画祭の開催によって、学生の文化による地域復興という目的は、学生自身の学びの深化と実践において効果的に行うことができた。ただし、実施した教員としての反省点、改善点としては実行する人数と日数の少なさがあつた。この期間の中で制作、ワークショップ、イベント設営そして実施という内容は少々過密であつた。これは今までの復興支援活動と同じ期間の設定であつたためである。しかし学生はその与えられた条件の中で思う以上の活動の成果を納めた。そして学生の成果報告にもいくつか出てきたが、映画祭としての活動へ復興支援をソフトチェンジしたことが成功したといえる。学生からもまた現地の参加住民からも翌年以降の継続開催を望む声もあつた。しかし翌年から筆者が部署異動してしまつたこともあつて、単年度の開催で終了となつてしまつた。これは担当者が変わつても引き続き行えるシステムを作れなかつたことが問題である。

田島悠史は「小規模地域アートイベントと観光・地域活性との接合」の中で、イベントの弱点について以下のように述べている。

イベントの弱点は一過性である。イベントが終わり、芸術（家）が去ると、まちも人ももとに戻つてしまうことが少なくない。しかし、まちに残つたアウトカムは、小さな観光資源となり、あるいは、それらを毎日見つめる地域住民の心を変える刺激剤になりうる力を持っている。<sup>14</sup>

つまり、我々にとつても映画祭の後に継続して現地で引き継がれるとして残せる活動があるべきであつた。例えば、映画制作体験ワークショップにおいて、我々が去つたあとでも引き続き現地の方々が日々の生活の中で行えるような映画制作のきっかけを与え、その集大成としての映像作品を、翌年の映画祭で出品してもらうなどが考えられたかもしれない。

また、タイトな日数の弊害として、各班の企画への指導時間が短くなつたこともある。それにより、4作品中3作品がいわゆる劇映画の形を取ることとなつてしまつた。これは、復興支援活動であることと、通常の授業と同様に学生の表現力向上のための教育の一環であることの認識を十分に指導できなかつた結果である。それにより学生は復興支援活動を重点的に認識し、現地の人に喜んでもらえるようなものを作ろうという方向へと流されていってしまった。3章において述べたように作品の自律性が低く、映画制作が手段になつてしまつた。劇映画が悪いわけではないが、様々な映像表現を学び、個が生み出す新たな映像表現の可能性を筆者の授業は行つてきた。しかしそのような個が生み出す新たな映像表現ではなく、地域に阿る表現をすることが地域復興につながるのだという学生たちの単純な認識を、指摘しても理解させるところまでには至らなかつた。

継続可能な活動内容やシステムの構築と、自律した作品による復興支援としての映像制作教育、この2点を重視した活動にしていく必要がある。

最後に、2021年度に、少し前となる2016年度の活動をまとめたことについて記す。本来であれば上記の反省点を活かし、また後年も南三陸映画祭を行い、その改善したことによる教育的効果をまとめるとともに文章化したいと考えていた。しかし2021年度は震災から10年が経ち、「私大ネット36」等の活動が一段落するということとなつた。これで完全に大正大学と南三陸の関係が終わるということではないが、それによって活動が大きく変わっていくことが決まつた。これにより、南三陸映画祭の再開は可能性として非常に低くなつてしまつた。しかし作品の自律性を謳うのと同じく、映画祭自体の自律性も再考し、その活動を根本から見直した新たな企画として作りあげていくべきであろう。そのように今後の可能性をさらに考えていくこととし、一度結びとしておく。

<sup>14</sup> 田島悠史：小規模地域アートイベントと観光・地域活性との接合 [アートプロジェクトとアウトカム部会報告]、環境芸術15.1

(0),14, 2015年

## 参考文献

- 吉澤弥生：アートはなぜ地域に向かうのか ―「社会化する芸術」の現場から―、フォーラム現代社会学、18巻、pp. 122-137、2019年
- 金光淳：アート・フェスティバルは地域をどのように表象し何を可視化するのか：島連想イメージのネットワーク分析、理論と方法33巻1号、2018年
- 金谷信子：瀬戸内国際芸術祭における公民パートナーシップ ―その利点と課題―、広島国際研究20、pp. 75-91、2014年
- 熊倉純子：日本型アートプロジェクトの 歴史と現在1990年 → 2012年」補遺、アーツカウンシル東京、2015年
- 荒川佳大、真野洋介：地域での文化活動の派生からみた地域多主体型アートプロジェクトの役割に関する研究 ―墨田区向島地区での一連のアートプロジェクトを事例として―、(社)日本都市計画学会 都市計画論文集 No. 45-3、2010年10月
- 小泉元宏：地域社会に「アートプロジェクト」は必要か? ―接触領域としての地域型アートプロジェクト―、地域学論集 鳥取大学地域学部紀要9(2)、pp. 77-93、2012年
- 村山にな：房総里山芸術祭 いちはらアート×ミックス―地域の前進性とアートの後進性の擦り合わせ―、芸術研究11、玉川大学芸術学部研究紀要、pp. 17~31、2019年
- 中島正博：過疎高齢化地域における瀬戸内国際芸術祭と地域づくり ―アートプロジェクトによる地域活性化と人びとの生活の質―、広島国際研究18、pp. 71-89、2012年
- 長畑実、枝廣可奈子：現代アートを活用した地域の再生・創造に関する研究 ―直島アートプロジェクトを事例として―、大学教育第7号、pp. 131-143、2010年
- 椎原伸博：「地域アート論」以降の「アートプロジェクト」論について、地域政策研究、第20巻第2号、pp. 81~93、2017年
- 田島悠史：小規模地域アートイベントと観光・地域活性との接合 [アートプロジェクトとアウトカム部会報告]、環境芸術15. 1(0)、14、2015年
- 野呂田純一、椎野信雄：現代アートによる地域・都市間の〈関係性〉組み換えの可能性、湘南フォーラム Vol. 18, pp89-101、2014年2月
- 高橋憲人：大学教養教育における地域アート実践の試行、弘前大学教養教育開発実践ジャーナル、第4号、pp. 49~64、2020年3月